

---

# 傳き勇者

imaiwa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傳き勇者

### 【著者名】

N1232K

### 【作者名】

imaiwa

### 【あらすじ】

勇者は戦闘を繰り返すたびに、力の異変に気がついた。ついでに、

た。

(前書き)

ドリákヒ風味。

戦士ハツサンが最後の魔物を倒すと、雄たけびを上げた。周りにいる仲間の僧侶ジンカー、魔法使いマールも、それぞれ一息つくなり、額の汗を拭つて一時の休息に身を浸している。3時間ほど、魔物を狩りつづけて、さすがにメンバーの顔にも疲労の色が浮んでいた。しかし、一人だけ疲労だけとは思えない、濃く暗い影を顔に刻んで俯いている者がいた。

「どうしたの？ 勇者？」

その異変に気づきマールは勇者に気遣わしそうに声をかける。

「え？ あ、ああ……何でもないよ」

けた。夕暮れの太陽に虚ろな眼差しを置いている。

「どうしたんじゃろな……」

マールの傍にいたジンカーが、マールにぼそつと呴いた。

「長旅で疲れたんじや……」

顔を見合わせ心配そうに一人は勇者の背を眺めている。

たが、そんな雰囲気をハンマーでぶち壊すような勢いで、勇者に迫るものがあった。勇者の傍までズカズカ駆け寄ると、ハッサンは

勇者の背中を赤い金属の箒手をつけた右手で、思いつたり叩く。

「どうした！ 勇者、元気ねーなー。 もつとしゃきっとしぃよー。」

「あ、ああ……ハツサンか……」

「ん~？ ビ、どうしたよー？」

ハツサンは勇者の顔を横合いからみてびびった。夕日を浴びて朱色に染まつた勇者の瞳から、涙が止め処なく滴り落ちていたからだ。

「ハツサンは良いよな……単細胞で……」

「な、おま、ケンカ売つてるのかー！？」

後ろにいるジンカーとマールの顔は、勇者の言葉で一瞬にして凍りつき青褪めた。ハツサンは肩をそびやかし、怒りで体を小刻みに震わせている。それを見て直ぐに後方の二人が駆け寄り、ハツサンを宥めにかかる。

「まあ、待てハツサン！ 勇者は疲れてるんじやろ」

「落ち着いて、ちょっと勇者今おかしいのよ……」

一人でなんとかハツサンの怒りを静めようと、両肩にそれぞれ手を掛けて押さえ留める。その間、勇者はマントを右手でつかみ、眼元まで持ってきて拭つた後、三歩ほど歩いた先にある小指に腰を降ろした。

「チツ、もういいー」

肩を大きく震わせ一人の手を振り解くと、ハツサンは勇者にそっぽをむいて、腕組みをしたまま口を閉ざした。

マールとジンカーは取りあえず治まりがついたので胸を撫で下ろす。

そして、ジンカーはマールに眼で何かを訴えかけた。そのジンカーの口配せを理解し、マールは勇者に静かな足取りで近付いていく。

「勇者、どうしたの？」

「マールか……」

背を前に倒して、股間の辺りで手をくんで、親指をすり合わせる勇者。その表情は陰々として、どこか悲しげにマールの瞳に映る。勇者は深く溜息を一度ついた。しばらく沈黙したのち、勇者は右耳にかかる金色の艶やかな髪を搔きわけながら、

「俺は死んでいるんだろ……？」

と、ぼそつと呟いた。

マールの瞳孔が途端に大きく開き、はつとしたように唇を少し開く。

「な！」

「勇者まさか……」

ハッサンの耳にも勇者の言葉は届いていた。一言発した後、勇者を顧みて絶句したまま立ち尽くしている。ジンカーはそれとは対照的に、眼を細めて険しい表情で、濃緑のローブを揺らしながら勇者に歩み寄る。

「勇者よ、いつから氣づいてたんじや……？」

マールが何も言えずに勇者の後ろに佇む。その隣にジンカーはやつてくると、勇者を見下ろし静かに尋ねた。

「三日記れ……」

と、細く呟くと、勇者は更に低く暗い声で言葉を繋げていく。

「最初は氣のせいかと思つてたんだ、だけど、俺の心臓の音がどうしても聞こえ無いんだよ……どんなに激しい戦いをした後でも息もきらないし、鼓動の音も聞こえない……おかしいだろ?」

自嘲氣味に薄笑いを浮かべる勇者。

「やうか……氣づいてしまったんじやな……」

「そんな……」

ずっと黙っていたマールが気持ちを抑えきれず、目に涙を溜めながらぽつと言葉を漏らした。そして、ジンカーの横顔を見やる。ジンカーは眼を閉じたまま押し黙つていた。

「おこ、やうこひ」とだよー。」

ハッサンがどかどかと巨体を揺らしながら、三人の元へやつてきた。

その瞳は明らかに動搖して、左右に小刻みに震えていた。

「実はじやな……」

と、ジンカーは前置きするかのよつと一言漏らすと、それを皮切

りに真相を語り始めた。

ジンカーの話によると、勇者は5日前の魔物との戦いで、胸を魔物がもつ剣で貫かれた。血を胸から噴出し倒れた勇者。それに直ぐに気づいたマールが魔物を炎の魔法で焼き払い退治すると、ジンカーに大声で叫んだ。

『ジンカー！ 勇者が……』

『こりゃいかん！』

勇者を仰向けにして、その上に掌を翳して、ジンカーは回復魔法を施す。掌から白い光が勇者の傷口に降り注ぐ。傷はそれを吸収するかのように塞がつていった。一瞬明るみをその顔に浮かべるマール。だが、ジンカーの表情は強張つたままだ。魔法を使い終えると、そのまま掌を勇者の心臓に置き、直ぐに右手首をつかむ。しばらくその手をジンカーは離さなかつた。しかし、太い白髪の眉毛をハの字型に下げるとき、手を勇者の手首からゆつくり離して、眼を強く閉じて目尻に深い皺を刻んだ。ジンカーの所作を一部始終見ていたマールは薄々何かを感じ取つたらしく、目尻に涙をためはじめた。

だが、マールの涙が頬を伝い始めたとき、不意にジンカーが重い口を開いた。

『仕方ない、アンデッドの魔法を使うか……』

「ハツサン……おぬしはその時離れた場所で魔物と一人戦つていたから、知らないのも当然じゃ」

「……」

「ジンカー……、アンテッドの魔法つてまさか……」

一時的に死んだ者を蘇生するアンテッドという魔法 その存在をハツサンはどこかで聞いた事があった。そして、その魔法の効果時間も知っていた。5日前のあの時も確か夕暮れ時だったことをハツサンは思い出す。すると、ハツサンは全てを悟つたのか、大きな体を力なく折り曲げ、右ひざを地につき顔面を大きな手で包んだ。

「そろそろね……」

「……」

「……」

「ここにいる全員が全てを悟つた時、勇者は体の位置を皆に向けて

微笑んだ。

「ありがと……お前たちの温かい心遣いは忘れない……」

「勇者……」

そう勇者が呟いた時、西の山の端に夕日が丁度、姿を完全に落とし込んでいった。

その瞬間 勇者の体は大気に交わるように消えていた。宙に置き去りにされた鎧が、鈍く重い音を立てて小石に落ちた後、周りに生い茂る雑草に無造作に転がつていった。

(後書き)

昔ブログで書いた短編です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1232k/>

---

僕き勇者

2010年12月10日21時50分発行